＜図書案内＞むくげ通信319号 2023年7月30日

## 『あんなにあった酸葉をだれがみんな食べたのか』『あの山は本当にそこにあったのか』

朴婉緒 著　　真野保久・朴暻恩・李正福 訳　　影書房

信長たか子

会友の信長たか子さんに図書紹介をおねがいしました。信長たか子さんは、西咸子さん、松下量子さんと朴婉緒『母の杭』（1992年）を自費出版されました。学生センター朝鮮語講座の講師が紹介してくれたものでした。

この本の凡例によれば上の二著を合わせて単行本化したものである。従って500ページを超えるが、読みだすと引き込まれてしまう。自叙伝小説Ⅰ・Ⅱになっていて、著者は「自画像を描くように書いた文章」であり、純粋に記憶力だけに依拠してかいてみたという。

Ⅰ、『**あんなにあった酸葉・・・**』は、幼年期から19歳のときに始まった朝鮮戦争まで。

開城の近くで生まれ育った著者は、7歳までを“野生の時代”と題しているが、特にこの“野生の時代”は著者の忍耐強さと深い思考の元になっているのではないかと思わされる。一家の頭であるお爺ちゃんは著者を目に入れても痛くないほどかわいがり、どんな時も味方になり、周りの人たちからも守りとおした。著者はそういう揺るがない安心感の中にあって外に出れば、豊富な自然の中で、自然の一部になっていた。子どもたちはチガヤの新芽、野ばらの芽、山イチゴ、葛の根、昼顔の根、酸葉、栗、ドングリを食べ、エビや蟹を獲り、トンボや草で遊んだ。にわか雨も歓喜のひとつ。同時に悲哀も自然からやってきた。夕焼けがひときわ赤いこと、トウキビの穂のゆれが悲しかったり，そんな時は涙があふれるのをじっと待ったと。何という豊かさだろう。著者が７歳の時に、母と兄と共にソウルに出た後はこの素晴らしい体験は二度とできなかった。日本の植民地下とその後の戦争で土手の酸葉はおろか、自然も人も荒廃してしまった。自然に生えてそこに行けばいつでも口にできてにんまりできるものなんてもうない。人が食べてしまったのではなく、日帝支配とその後の戦争という怪物が酸葉をたべてしまったのだ。

著者はソウルの国民学校に入り、最初に習った日本語が「奉安殿」、そして便所、先生、学校、教室、運動場、友だち、何年生、何組、などでひとことの朝鮮語も使ってはならなかった。まさに日本の植民地支配の真っただ中。特に親しい友だちもいなかった。著者はこの頃、家の中にも外にも全く安らぐ場所がなくなってしまったという。

そして日帝支配の末期には女子高へ。しかし学校は軍需工場になり、午前中２時間の授業をした後、午後は教室が工場になる。軍服にボタンをつける、雲母を削る作業、松やにの採取などをした。松の木の皮がボロボロになっているのを見て、疲弊した国土を見た気がしたとのことだ。

兄は勤め先が軍需工場のため、徴用はまぬがれた。第二次世界大戦の後に、朝鮮は解放されるが、すぐにソ連とアメリカの侵入に巻き込まれ、兄は人民軍に傾いていた事からアカ、自分はメスアカと呼ばれた。国連軍と町内の人の告発によって家宅捜査を受け、恐怖に。途中兄の行方が分からなくなり、一家は警察などににらまれ、二番目の叔父は人民軍に飯をつくったことで処刑された。その後、兄は人民軍にならずに帰ってきたが深刻な被害妄想に陥っていた。家族がソウルから避難するために通行証である市民証や道民証を得ようとして苦労する。漢江さえ渡ることができたらと狂わんばかりに気をもむこの場面は真に迫る。

兄は以前の職場であった学校の宿直室に避難しているとき、青年防衛軍の兵士の誤射が兄の足を貫通した。兄を荷車に乗せて避難を続け、漢江までは到着できなかったが、ようやくすでに避難して空き家になっていたソウルの峴底洞の知り合いの家に着いて一息つくことになった。この時、著者は皆が避難して煙が立ちのぼる家さえない変わり果てたソウルの街をみて、恐怖を感じたが、一瞬のうちに思考の転換が起きたという。その時の文章を引用すると、「私だけが見る光景であるなら、そのことを明らかにする責任がきっとある。それこそ偶発的な災いに対する正当な復讐だ。明らかにする責任は巨大な空虚の事だけではない、虫けら扱いされた時間も証言

しなくては。このことはいつか書くことになるだろうと感じた。そうしてこそ虫けらからようやく抜け出すことができるはずだ。その予感が恐怖心を追いやった。少しばかりの食糧も心配にならなかった。連なった家々が食糧庫に見えた。これらの家にまさか小麦粉の少々、麦の一升や二升ないわけがない。すでに空き家のものをいただく計画を立てていたが、食べていくためだと恐れはしなかった」。

**Ⅱ、『あの山は本当にそこにあったのか』**

空き家になった家に隠れるように住んだ。ソウルは、人民軍か国軍かどちらの統治かわからなかった。自分たちは開城から南下してきたが病人が出て漢江を渡れずにいる、ここにいるしかなかったということにする、先のことを心配するのは世の中が平和なときにすることだ。戦時には生き延びるのが大事、それを知らないと知る者のお荷物になってしまう。ここは、何としても生き延びようとする著者の気持ちにふれるところだ。

この家にはすぐそばに井戸があったし、兄嫁と二人でほぼ毎晩空き家から米、小麦粉、油などを得てきて母、兄、兄嫁、甥っ子二人そして自分の腹を満たしたのだ。兄嫁が「泥棒より聞こえがいいじゃないですか」と補給闘争と名付けて著者と二人で空き家に入っては食べ物を探して持ち帰る行動は悪いことだと思いながらもこれが生きるすべてだった。

食べ物を得るために著者は峴底洞人民委員会の仕事を引き受けたが、ここは人民軍の傘下であった。著者は混乱しながらも仕事を続けていたが、ある日著者と兄嫁と下の甥は北に、邪魔になる兄と母と上の甥はここに残すというように二分された。お互いに「臨津江だけは渡るな」と言い合った。北に行くトラックに乗せられる寸前に、兄嫁の機転で避難証明書と食事券を忘れたといってトラックに乗るのを避けることができた。著者たち３人は４日間歩き続け坡州に。ここの人民委員会で高熱を出した甥も助けられる。10日後には交河に逃がしてもらい、そこを経て先に着いているはずの母や兄の待つ敦岩洞の家まで帰ってきたが、本当に家族に会えるのか、長旅の結末はどうなるのか、一寸先が見えない現実がもどかしくて肝が縮みそうだったとのこと。

帰り着いたのもつかの間、叔父がスパイだという告発で警察が叔父を連行しに来て著者も調べられた。著者はここでキレた。「そうよ、うちの家族はアカよ。二番目の叔父もアカに追い込まれ死刑にされた。国民を人民軍の支配下に放り出しておいて自分たちは逃げてしまったくせに、戻ってくると人民軍に飯を作ったことも罪だといって死刑にする。そんな国で私も生きたくない。いっそのこと殺せ、…以下略」統治が人民軍だったり国軍だったりになる中で著者たちが翻弄されて疲弊した様子がよくわかる。結果的に叔父は帰され、著者には郷土防衛隊という青年団に就職を世話したのだった。ちょっと落ち着いたが再びソウルからの避難命令が下りた。著者は家族とは別に勤め先の人と避難した。しかし、避難先から帰って5日目に兄が死んだ。

この後、著者はアメリカ軍の購買部PXのパジャマ部で働くことになる。特にソウル大の学生だということがプラスに働くが本人は大学で勉強をする状態ではなく、気持ちも離れていた。ここでの給料は一家を養えるほどであった。PXでの人とのつながりや仕事の内容も詳しく、興味深いが紙面の都合で省略する。ぜひ、本文を読んでいただきたい。ここで結婚相手に会って22歳で結婚をした。

小説はここで終っている。

^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^

朝鮮半島が日帝の植民地支配から第二次世界大戦、アメリカとソ連の侵入、そこから起きた朝鮮戦争というように翻弄された時代に生きた著者の生きざまに息苦しくなるくらいだ。記憶を織りなすように書いた文章というが、それは時代の現象だけでなく、自分と、自分を取り巻く人々の心の動きまで綿密にとらえて描かれていることに驚く。すごい記憶力だと思うが生きた時代がそれほど厳しかったとも言えるだろう。

文章が大変分かりやすく、丁寧で、内容もよくわかる。翻訳者の苦労は並大抵ではなかっただろう。そして、巻末の訳者解説は、この複雑な時代を理解するのにとてもありがたく、本文を読みながら、何回も解説と照らし合わせて理解を深めることができた。多くの人にぜひ読んでもらいたい本である。